

安政江戸地震の傷あとを大暴風雨が襲った (安政の「東京湾台風」)

安政2年10月2日(西暦1855年11月11日)の夜、本所・深川・浅草などの江戸の下町を直下型の激震(M=6.9)が襲った。「安政江戸地震」と呼ぶ。潰れ・焼失1万4千余軒、死者約4千人。地震後30余か所から出火し、新吉原の遊郭では700人の遊客・遊女が焼死した。

翌安政3年8月2日(西暦1856年9月23日)、江戸は大暴風雨に見舞われた。戌の刻(午後8時)ごろから雷を伴った風雨が激しくなった。大石が飛び、大木が倒れ、多くの仮家が飛んだ。600石積みの舟が川口に吹き上げられ、死者は10万余人(近世史略)。震災直後の前代未聞の大風災に、人々は不安におののき、顔色は死人のようにそう白、生気がなくなった。

図は瓦版(版元など不明)で、書き出しに「松柏砕けて薪となり桑田変じて海となる(世の中の移り変わりの激しいこと)とは、まことなるかな」とある。打ち続く自然の猛威に、変わり果てた江戸の惨状を挿絵とともに活写した。

○**芝金杉浦**：暴風で人家はことごとく潰れ、多くの大小の船は大破し、見物人が市をなす。前年水戸家で建造された御用船「大元丸」は浜に打ち上げられ、半分は泥中に埋まった。

○**芝神明前**：芝大門の潰家から出火し、神前町、三島町、宇田川町の西方まで燃え広がった。大風雨中の火事の中を人々は逃げ回り、多くの人々が死んだり、けがをしたりした。高潮で水があふれ、増上寺前の出水3尺余。

○**築地門跡**：西本願寺の雲のようにそびえ立つ大御堂は、先の大地震では屋根が少し落ちた程度だったが、暴風雨では大音響を発生し、ちょうちんをたたんだように潰れた。これを見ようと男女が数珠つなぎ。築地浜では御屋敷が崩れ、500石積みの大船が打ち上げられた。

○**永代橋**：500～600石積みの荷船が風浪に流され、橋にぶつかって中ほど7～8間(約15m)を押

し破ったので往来が絶えた。350石積みの大船「明神丸」が打ち上げられ、佃島につながれた大船・小船、木場の木材、その他家財、人畜の流出は数え切れぬほどだった。

○**下谷金杉**：大風中に市ヶ谷、吉原町、下谷金杉村などの潰家から出火し、けが人が出た。

○**新吉原**：下谷坂本町辺りの潰家から出火し、新吉原へ飛び火し、遊女屋3軒をはじめ、一帯は残らず焼けたが浅草観音は無事だった。

○**その他**：浦賀港の大船の破損は数知れず。鎌倉七里ヶ浜では津波(高潮)で残らず家が流れ、死者・けが人多数。藤沢宿西村は音無川から大水が出て遊行様寺領100石が残らず流れた。房州上総木更津辺りは津波で多くの家屋が流失した。

船の流失・家屋の損壊などをまとめると、次のとおりであった。

●大船85艘、このうち壊れ20

●五大力船・大茶船60艘、このうち壊れ30

●屋根船・にたり(荷足)船245艘、このうち壊れ111

●死人480人、けが人数知れず

●手前建家89,500軒余、江戸備家64,042軒

この暴風雨・高潮は、猛烈な台風が東京湾のすぐ西方を通ったため発生した。

今年は5,000人の死者を出した伊勢湾台風から50年になる。大地震と台風の犠牲者を減らす道に終わりはない。

【参考文献】宮澤清治(1996)：安政3年江戸の大風災の惨状、本誌186号(1996年7月)

(注)

五大力船(ごだいりきぶね)：江戸湾を中心に関東各地の沿岸で活躍した海船(大船)。五太力船とも。

茶船(ちゃぶね)：大型回船の積荷の陸揚げや、船に飲食物を提供する小船。

にたり船：茶船の一種で小荷物を運ぶ小船。

宮澤清治(元NHK気象キャスター／元本誌編集委員)

二、井田家三の龜仙を大に苦しむに由りて又之を用ふるに川等

龜仙丁刻下水を逆を品下在田丁切是毎日見たり龜井石押上五百ら之

柳河小橋板元あり四大水より大なる又又水橋向の河川依りて川丁給

断鼓井河川岸等々所歴大なる仲所金品大なり自來や依りて見當り

とと勝るその外松屋板元大なる八幡社内等々河川依りて見當り

ととくつと八より川を逆水に流し給ふ橋板元等々橋よりつとる三千二百

本橋大水にて板元大流是す此大板小舟打よる破板その板元は此處橋板元

板元板元大なる流板元河川依りて見當り

田畑等大流是死に人等河川依りて見當り

本橋丁板元河川依りて見當り

河川依りて見當り

河川依りて見當り

河川依りて見當り

河川依りて見當り

河川依りて見當り

河川依りて見當り

河川依りて見當り

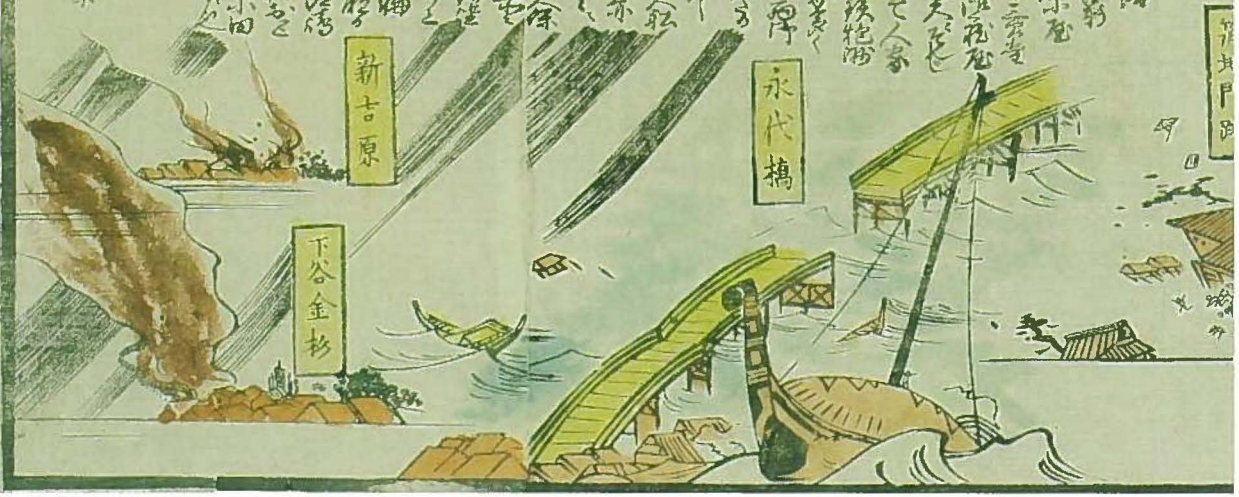
河川依りて見當り

河川依りて見當り

永代橋

新吉原

下谷金杉



安政三辰八月廿五日大風雨出水損場所之図 (早稲田大学図書館所蔵)

